

光のデイヴェルティメント

山下 祐樹

16世紀以降、祝宴などで演奏されることを目的とした音楽形式を「ターフェルムジック (Tafelmusik)」と呼んだ。「食卓の音楽」と訳されるように、軽快で明るく華やかな音色を特徴としていた。その後、音楽史の流れの中では18世紀半ばに「デイヴェルティメント (divertimento)」という器楽組曲が流行した。語源はイタリア語の「divertire」にあり「愉悅」「気晴らし」などを意味している。軽妙な明るさを前面に置いた音楽が特徴で小規模の管弦楽などで演奏される。中村幸一歌集『あふれるひかり』は短歌の綴られた作品集であるがこの短歌の連なりは「ターフェルムジック」や「デイヴェルティメント」の系譜上にある「音楽」と表現しても良いのではないだろうか。これらの曲のように溢れる光が積み重なり一つの世界を作り上げる。各所から放たれている光、それぞれの陰影に手を伸ばしてみたい。

一 「川は流れる」は川の流れと水沫、その躍動感と透明感の狭間に人生や日常の雑感が込められている。それは季節の中で感じる色相を採り入れ、輝くものと暗みに潜むものに対応する描写として表現されている。「浮かぶしらとり」は磯や海辺に浮かぶ白鳥への着目を端緒とし、波の強さと荒海の

厳かさと同じ合う人間の心情、その抗いを讀えながら、冬の先にある春への憧れを込めている。「こころの声を聞け」ではカフェやジャズの個室的世界の中に身を置きながら、日々変化する気候や季節に思いを馳せ、軽快な興趣を含みながら想像を膨らませている。「老いて歌わず」では、若さから老いへの人間の経過に向き合いながら懐古し、若さの中に轟めく光のごとき特性を見つめ直している。老いて歌わずも、憧れに似た一種の苦みのある語らいとなり得ている。「黄金の橋」は神宮へと至らしめる参道としても表象できるものである。黄金の橋は単に直線的な道があるだけでなく、辺りには森もあり、表参道のカフェへと誘う。崇高なる恩寵が潜む地と、明るき周遊の対比が心地良く感じられる。「花散るところ」は桜満開の後に始まる新学期の日常が花散りの季節として描かれている。新たな春を目指し、時を費やす青年たちの後姿が目につく。「すべてことなし」では、天然の風景や自然の景観に対する愛着とともに、森羅万象、その果敢無さや流転の因果を純なる印象にて表現している。「不二」では、富士を、不尽なる存在を、二つとない存在を題材とし、紫や紅などの色彩を織り交ぜながら、その憂愁の想いを散在させている。「恋いわたる」では、人間の何気ない心情の変化に触れる中で、その客観性に内包される物事や事象に対する愛着や恋を柔らかな絹のように綴っている。

二 「しあわせな猫」は猫の話であると同時に猫と比喩し

